

【論文】

博物館を活用した社会科・地理歴史科の 授業づくりに関する試論

—「社会科・地理歴史科教育法」における実践の検討—

山下達也

はじめに

本稿は、博物館を活用した社会科・地理歴史科の授業づくりについての新たな知見を得ることを目的として、同教科の教員免許状取得予定の大学生による実践について検討するものである。

このような課題を設定する背景には、中学校の社会科または高等学校の地理歴史科教育における博物館を活用した学びへの着目とその推進がある。敷衍すれば、中学校社会科の教育について、現行の中学校学習指導要領には、「博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査したりするなどして具体的に学ぶことができるようにすること」¹とあるほか、高等学校における地理歴史科の教育についても、高等学校学習指導要領に、「博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして、具体的に学ばせるように工夫すること」²と記されている。また、社会科・地理歴史科に限定されるものではないが、2011年に改正された「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」には、「学校教育及び社会教育における博物館資料の利用その他博物館の利用に関し、学校の教職員及び社会教育指導者に対して適切な利用方法に関する助言その他の協力を行うこと」³という文言がある。

中学校、高等学校の学習指導要領および「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」の中で学校教育（特に教科指導）における博物館の活用について言及がなされていることもあり、今日では、いくつかの博物館によってその実践例の提示がなされている⁴。こうした取り組みによって、博物館活用の可能性と授業の具体案が発信されてる。しかし、授業そのものについての案が博物館側の取り組みによって示される一方、博物館を活用した授業づくりの過程や実践に関わる授業者側からの論考については、十分な蓄積がなされているとは言い難い状況である。

そこで本稿では、社会科や地理歴史科の授業をデザインする際、授業実施予定者が博物館を

どのように活用しようとするか、特に、博物館に足を運ぶきっかけ、資料選択行為の特徴や傾向、授業での活用方法案、実践者によって語られる博物館活用の有用性やアポリアについて論じることとする。

つまり、本稿は博物館を活用した授業実践そのものではなく、あくまで授業を行なう者が博物館にアプローチし、授業をデザインする過程に焦点をあてるものである。以下、本論では、第一に、授業実践者たる教員が博物館に足を運ぶこと自体を促進する取り組みに着目する。その際、国立科学博物館によって始められた「教員のための博物館の日—先生が子どもに戻って博物館を楽しむ日—」（2008 年度～）を注目すべき事例として取り上げる。第二に、授業実施予定者が博物館をどのように活用して授業を構想するかという点についての具体的検討を行いたい。その際、社会科・地理歴史科の教員免許状を取得する予定の大学生らによる授業づくりの実践事例に着目する。

1. 教員の博物館活用を促進する取り組み

中学校の社会科、高等学校の地理歴史科教育において博物館の活用が期されていることは前述のとおりであるが、近年、教員が博物館を活用した授業づくりを促進する取り組みとして、博物館側からの積極的な働きかけが見られる。こうした働きかけは、教員が博物館に足を運ぶきっかけをつくり、授業での活用の可能性を示唆する機会となっている。

このような働きかけの中で昨今特に注目されるのは、国立科学博物館が実施している「教員のための博物館の日—先生が子どもに戻って博物館を楽しむ日—」（以下、「教員のための博物館の日」）という取り組みである。国立科学博物館によれば、「教員のための博物館の日」とは、「学校の先生に『博物館に親しみを持ってもらうこと』、『博物館の学習資源を知ってもらうこと』を目的としたイベント」⁵であり、2009 年度以降は文部科学省が後援する取り組みとなっている⁶。

「教員のための博物館の日」は、2008 年に開始され、以降 2016 年度現在まで毎年開催されている。当初は国立科学博物館による単独開催であったが、2010 年度以降は、他の博物館等⁷の企画参加も見られるようになり、9 年目を迎えた 2016 年度には、全国 27 の博物館等が「教員のための博物館の日」を開催した。

【表 1】は、2008 年度から 2016 年度までに「教員のための博物館の日」を開催した博物館等を年度ごとに整理したものである。

【表1】「教員のための博物館の日」開催状況（2008～2016年度※）

年度	地方	開催日・期間	開催機関
2008	関東	12月26日	国立科学博物館
2009	関東	12月26日	国立科学博物館
2010	北海道	1月16日	旭川市科学館 サイバル
	関東	8月29日	国立科学博物館
2011	北海道	8月5日	旭川市博物館
	関東	8月28日	国立科学博物館
	中部	8月22日	蒲郡市生命の海科学館
		9月4日	静岡科学館
2012	北海道	7月27日	旭川市旭山動物園
	関東	8月24日・25日	国立科学博物館
	中部	8月22日	豊橋市自然史博物館
		9月1日	静岡科学館
	近畿	8月17日	大阪市立自然史博物館
		8月21日	兵庫県立人と自然の博物館
2014	北海道	7月29日・30日	帯広百年記念館
		8月12日	北海道開拓の村
		1月16日	旭川市科学館
		1月9日	苫小牧市美術博物館
	東北	8月18日	ふくしま森の科学体験センター
	関東	8月1日・2日	国立科学博物館
		8月5日	ミュージアムパーク茨城県自然博物館
		8月26日	千葉県立現代産業科学館
	中部	8月5日	静岡科学館
		8月6日	長野市立博物館
		8月22日	蒲郡市生命の海科学館
		9月20日	浜松市博物館
	近畿	8月7日	大阪歴史博物館
		8月8日	大阪市立自然史博物館
	中国	8月20日	島根県立三瓶自然館
		8月20日	鳥取県立博物館

	四国	7月30日	徳島県立博物館
	九州	7月31日	宮崎県総合博物館
2015	北海道	7月28日	帯広百年記念館
		7月29日	旭川市旭山動物園
		8月4日	北海道開拓の村
		8月5日	苫小牧市美術博物館
	東北	8月3日	ふくしま森の科学体験センター
	関東	7月31日	国立科学博物館
		8月6日	埼玉県立自然の博物館
		8月6日	ミュージアムパーク茨城県自然博物館
		8月26日・27日	千葉県立現代産業科学館
		10月6日	埼玉県立歴史と民俗の博物館
	中部	7月29日	豊橋市自然史博物館
		8月3日・4日	長野市立博物館
		8月4日・2月27日・28日	静岡科学館
	近畿	8月5日	大阪歴史博物館
		8月7日	大阪市立自然史博物館
	中国	7月31日	鳥取県立博物館
		8月19日	島根県立三瓶自然館
	四国	7月29日	徳島県立博物館
		8月21日	愛媛県総合科学博物館
	九州	7月18日	宮崎県総合博物館
2016	北海道	7月26日	帯広百年記念館
		7月29日	北海道開拓の村
		8月3日～9日	旭川市旭山動物園ほか北海道道北地域館
		8月3日	苫小牧市美術博物館
	東北	8月1日	ふくしま森の科学体験センター
	関東	6月15日・7月26日・8月1日	千葉県立中央博物館
		7月29日	国立科学博物館
		8月2日～4日	埼玉県立自然の博物館
		8月4日	ミュージアムパーク茨城県自然博物館

		8月2日・4日・5日・9日	埼玉県立歴史と民俗の博物館
		8月5日～7日	千葉県立現代産業科学館
	中部	8月5日	富山市科学博物館
		8月6日～7日	富山県 立山カルデラ砂防博物館
		8月9日～10日・18日	岐阜県博物館
		8月11日	長野市立博物館
		10月11日	蒲郡市生命の海科学館
		2月4日～5日	静岡科学館
	近畿	8月1日	明石市立天文科学館
		8月3日	大阪市立自然史博物館
	中国	7月29日	鳥取県立博物館
		8月17日	島根県立三瓶自然館
	四国	7月27日	徳島県立博物館
		8月19日	愛媛県歴史文化博物館
		8月23日	愛媛県総合科学博物館
	九州	8月18日	宮崎科学技術館
		10月29日	九州歴史資料館
		1月18日	阿蘇火山博物館

※2013年度の開催状況は不明のため除く。

(「教員のための博物館の日」HPを参照し、筆者が作成したもの。アクセス日は2016年11月10日。)

【表1】では回を重ねるたびに参加機関が増加していることや開催期間が延長されていることが確認でき、「教員のための博物館の日」の取り組みは漸次拡充してきたことがわかる。また、開催日の多くが夏休みの期間と重なる7月下旬～8月にかけて設定されており、現職教員が参加しやすいイベントとして企画されている点も特徴といえる。

では、「教員のための博物館の日」では、具体的にどのような取り組みが行われているのだろうか。これまでに行われた取り組みについて概観すると、単に開催機関の紹介やガイドツアーといったものにとどまる取り組みも若干見られるが、多くは「授業づくりに役立つ」ことを目的としたものであることがわかる。それらの一部を例示すると以下のとおりである。

「学芸員による授業で使える話題提供」(苫小牧市美術博物館・2016年度開催)、「子どもが喜ぶ授業づくり」(ふくしま森の科学体験センター・2016年度開催)、「授業に役立つ体験プログラム」(国立科学博物館・2016年度開催)、「授業に役立つ!博物館活用入門」(徳島県立博物

館・2016年度開催)、「授業と展示をつなぐ館内ツアー」(愛媛県総合科学博物館・2016年度開催)、「みんなで作ろう授業で使えるワークシート」(帯広百年記念館、2015年度開催)、「授業に役立つ自然史体験講座」(埼玉県立自然の博物館、2015年度開催)、「博物館にある“原石”教材」(豊橋市自然史博物館、2015年度開催)、「学習意欲を3倍UP!授業で使えるヒント」(徳島県立博物館、2014年度開催)、「授業に使える蒙古襲来絵詞」(宮崎県総合博物館、2014年度開催)、「授業づくり座談会」(静岡科学館、2013年度開催)、「授業で使える!科学博物館」(旭川市旭山動物園、2012年度開催)などがある。博物館という機関の特性上、また、国立科学博物館主導の取り組みであるため、全体的に理科教育を念頭に置いた企画が目立つものの、上記のような授業づくり一般、社会科・地理歴史科教育に関わる内容も少なくない。

こうした取り組みが毎年行われ、かつ年々開催地、機関の拡大がなされることによって、教員が授業づくりのヒントを得るために博物館を活用することが促進されていると考えられる。2016年度に初めて「教員のための博物館の日」を開催した九州歴史資料館によれば、参加した教員から「来年度もぜひ参加したい」という声が寄せられており、「教員のための博物館の日」をきっかけとして教員が博物館活用に興味を抱いたことがうかがえる⁸。また、大阪歴史博物館が行ったアンケート結果によれば、同館で開催した2015年度の「教員のための博物館の日」の参加者の感想は、「とてもよかった(73%)、まあまあよかった(26%)、ふつう(1%)で、よくなかったという回答はなかった。また、「博物館を有効に活用できるツールがたくさんあることを知れてよかった」「学習に使える教材などを貸していただけた」、博物館と連携して授業の組み立てを考えることができたりすることを知れた」等の個別意見が寄せられたという⁹。

「教員のための博物館の日」は、地域社会における諸機関との協力・連携が授業づくりにおいても求められる中、その可能性と方法を模索する教員と、自らの魅力と教育資源の豊富さについて発信する機会を求める博物館との互惠関係によって成り立っており、今後さらに拡大するものと考えられる。また、単発のイベントで終わらず、開催した博物館自らその取り組みを省察し、改善を図る動きも見られ、内容面での充実も期待されるものとして今後も注目される。

2. 博物館を活用した授業づくり実践事例についての検討

次に、授業実施予定者が博物館をどのように活用して授業を構想するかという点について、授業づくりの実践事例をもとにいくつかの知見を導きたい。

具体的には、まず着目する実践事例の概要について述べた後、①博物館の資料を選択する際の特徴と傾向について、②授業での活用方法とその特徴について、③実践者によって語られる博物館活用の有用性とアポリアについて論究することとしたい。

（１） 実践事例の概要

ここで取り上げる授業づくりの実践事例は、筆者が担当した 2016 年度の「社会科・地理歴史科教育法Ⅰ」を受講した 68 名によるものである¹⁰。受講生の大多数は次年度に行う教育実習に向け、授業づくりの基礎について学んでいる最中にあり、博物館を活用した授業づくりもその一環として行ったものである。大多数の受講生にとってこうした授業づくりの実践は初めての取り組みとなる。したがって、博物館を活用した授業づくりに関する経験を十分に有していない状態にある者が、授業を構想する際に見られる特徴や傾向という点でも注目すべき実践例となる。

また、授業づくりの実践事例で活用された博物館はいずれも明治大学博物館である。活用の対象範囲は同博物館における「商品部門」、「刑事部門」、「考古部門」の展示とした。展示について敷衍すれば、「商品部門」では、漆器や染織品、竹木工品、金工品、文具、和紙、陶磁器等の「商品の原材料、部品、製造技法、半製品から完成品にいたる製造工程、意匠の種別などを紹介し、世界にたぐい稀な意匠表現の豊富さを誇る、日本の伝統的工芸品の全体像を端的に一覧」できる展示内容、「刑事部門」では、「江戸の捕者具、日本や諸外国の拷問・処刑具など人権抑圧の歴史を語り伝える実物資料」、「考古部門」では、明治大学が行ってきた調査研究の成果を中心に旧石器時代から古墳時代にいたる各時代の文物が展示されている。いずれも中学校の社会科、高校の地理歴史科における学習内容と深い関わりを持つと考えられる展示であり、博物館を活用した授業づくりの実践を行ううえでは格好の博物館であるといえる¹¹。

なお、博物館を活用した授業づくりの手順としては、①明治大学博物館の紹介（授業内）→②明治大学博物館での調査（授業内）→③教材研究（各自）→④明治大学博物館での再調査（各自・任意）→⑤授業づくり（各自）→⑥授業案の発表と博物館を活用した授業づくりについての省察（次回の授業内）というプロセスを経た。その中でどのような特徴を見出すことができたのか、以下、授業構想及び事後アンケートによって得られた情報をもとに検討したい。

（２） 資料選択の特徴と傾向

まず、博物館を活用した授業を構想する際、どのような資料を選択するかという点について、今回の結果をもとに検討したい。

授業づくりの後に行ったアンケート調査によれば、活用する資料を選択する際、「生徒の興味をひくもの」をもっとも重視した者が 36 名（約 53%）、「教科書の内容との関連性の深さ」をもっとも重視した者が 19 名（約 28%）、「自分の専門や関心がある分野」をもっとも重視した者が 13 名（約 19%）であった（3 つの選択肢から 1 つを選択）。つまり、学習者の姿勢やモチベーションに関わる面で博物館活用のポジティブな効果を期す授業者がもっとも多かったということになる。

また、「博物館では授業で使ってみたいと思うような資料や知見が得られましたか」という問いに対し、「はい」と回答した者は46名（約71%）、「いいえ」と回答した者は20名（約29%）であった。この結果を、資料選択の際に重視したことという上述の結果とクロスさせると、次のような結果となる。活用する資料を選択する際、「生徒の興味をひくもの」をもっとも重視した者36名のうち、使ってみたい資料や知見が得られたと回答したのは26名、「教科書の内容との関連性の深さ」を重視した19名のうち、使ってみたい資料や知見が得られたと回答したのは17名、「自分の専門や関心がある分野」を重視した13名のうち、使ってみたい資料や知見が得られたと回答したのは3名であった。

使ってみたい資料や知見が得られたと回答した割合が圧倒的に高い（約89%）のは、「教科書の内容との関連性の深さ」を重視した集団においてである。ちなみに、彼／彼女らの選択した資料の多くは、「考古部門」のものであり、石器や土器の展示に着目したものである。「教科書の内容との関連性の深さ」を重視する授業実施予定者は、教科書の写真等で目にしたものを現物やレプリカに接近することで理解を深められる点に博物館活用の魅力を感じている。こうした特徴は、「教科書の内容との関連性の深さ」を重視した19名すべてが、「博物館を利用した授業づくりの魅力は何だと思いますか」という問いに対し、「授業で扱うものを実際に見ることができる」、「写真等では分からない大きさや質感を感じることができる」といった回答をしている点に顕著にあらわれている（自由記述）。

一方、活用する資料を選択する際に重視することとしてもっとも多かった「生徒の興味をひくもの」を挙げた36名のうち、使ってみたい資料や知見が得られたと回答したのは26名であった。この数字を評価することは容易ではないが、使ってみたい資料や知見が得られた26名のうち、20名が「刑事部門」における江戸の捕者具や日本や諸外国の拷問・処刑具の展示¹²を活用する授業を構想した点は大きな特徴といえよう。この資料選択の理由には、「生徒の興味をひくもの」であると同時に授業者自身が興味をひかれたものであったからという声が多く確認できる（20名中16名）。

最後に、「自分の専門や関心がある分野」を重視した13名のうち、使ってみたい資料や知見が得られたと回答したのはわずか3名であった点についてである。授業者の専門や関心を重視して資料やテーマが選択された場合、授業づくりで必ずしもネガティブな結果が出るというわけではないが、こうした姿勢で授業を構想する際には、活用する博物館自体の選択と使いたい資料や知見への教員側からのより積極的なアプローチが必要となる。今回の実践では、活用する博物館の指定と時間的制約により、使ってみたい資料や知見が得られなかった者が多いという結果になったと考えられる。

(3) 授業での活用方法とその特徴

次に、授業の中でどのような活用が見られたか、その方法と特徴について見ていきたい。

活用方法の面でまず特徴的であったのは、博物館資料を活用するタイミングである。敷衍すれば、68名中54名（約79%）が導入部分で活用するという計画を立て、授業の最初に「本時の学習内容」についての興味と関心を高めるために提示するというパターンが大勢を占めたことが注目される。上述したように、博物館の資料を選択する際、「生徒の興味をひくもの」（36名）を重視した者がもっとも多かったため、導入部分での活用を選択する者が多いことには首肯できる。ただし、他の事項を重視した者32名についても導入部分での活用を計画したものが半数を超えた点が注目される。つまり、博物館の資料を活用するタイミングとしては、前項で確認した資料選択の際の特徴の差にかかわらず、導入部分を選択するという強い傾向が確認された。

次に、博物館の資料を活用する授業がどのような目的を持ったものとして計画されたのか、いくつかの例で具体的に確認してみよう。

まずは、もっとも多くの方が選択した「刑事部門」における江戸の捕者具や日本や諸外国の拷問・処刑具の資料活用例について注目する。江戸の捕者具や日本や諸外国の拷問・処刑具の展示資料を活用する授業で設定された「本時の目的」は、多少の差はあれども、①人権尊重の立場に基づいた法の在り方について考える、あるいは②当時の人々の暮らしや処刑の在り方から時代性を読み取るという2つの内容に収斂する。例えば、授業者Aが、「過去の刑罰と現在の刑罰を比較し、倫理観を養うとともに法の在り方を学ぶ」ことを授業の目的とし、導入でギロチンや絞首台等の処刑具を写真で紹介することを計画していることは前者の、授業者Bが、「拷問される理由や方法を知り、当時の権力と民衆の関係性についての理解を深める」ことを目的として、「答打」や「石抱」、「釣責」に使用された道具を紹介することを計画していることは後者の典型的な例である。精神的な負担を考慮しつつも、こうした道具を用いた処刑・拷問の手順と残虐性を示すことで、一種の「衝撃」を与え、授業に引き込むことを狙っている点はいずれのタイプにも共通している。

また、「刑事部門」の展示に次いで多かった「考古部門」の展示資料を活用する授業の目的は、そのすべてが上記②の目標と類似するものであった。具体的には、「石斧」や「壺型土器」、副葬品等の提示と説明により、当時の人々の生活の様子や死生観に迫ることを狙う授業案が散見された。これらの多くは教科書や図説等の写真である程度の形状を確認できるものばかりであるが、博物館の展示に接することにより、一層興味を惹起し得ることを期すものが多い。

今回の博物館を活用する授業づくりの実践においては、博物館の資料を授業の導入部分で提示し、生徒の興味をひき、関心を高めるために用いられる傾向が強かった。また、その際、ある特定の時代に使用された各種「道具」を取り上げ、それをひとつの手がかりとして、過去の

現実にアプローチすることを図るものが多数を占めた点が特徴として挙げられる。

（４）実践者によって語られる博物館活用の有用性とアポリア

「社会科・地理歴史科教育法Ⅰ」における実践では、受講者が授業をデザインしただけでなく、各自が自らの授業づくりについての省察を行うことにより、博物館活用の有用性とその難しさについて考察した。ここでは、そうした営みの中で確認された実践者の語りについて見ていきたい。

まず、社会科・地理歴史科の授業づくりに博物館を活用することの有用性として挙げられたものはおよそ次の３点にまとめられる。

- ① 学習内容についての動機づけや関心を高めることができる。(56)
- ② 教員が専門的な知識を得、教授内容についての理解を深めることができる。(21)
- ③ 知識を得るための場の多様さに気付かせることができる。(11)

※（ ）内の数字は回答者数。なお、有用性については複数の事項について回答可とした。

前述したように、博物館の資料を選択する際には、「生徒の興味をひくもの」を重視した者がもっとも多かったが、このことと①の有用性に関する語りには強い相関が認められる。具体的には、「生徒の興味をひくもの」を重視して資料を選択した36名すべてが①の有用性について言及していることが確認された。また、博物館資料を授業の導入部分で活用することを計画した54名中51名が①の有用性について語っており、学習内容についての動機づけや関心を高めることと導入というタイミングにも関連性が窺える点が注目される。

数量的には①の有用性についての語りの半数にも満たないが、次いで多数であったのが、教員が専門的な知識を得、教授内容についての理解を深めることができるという有用性(上記②)である。これに関わるものとして、具体的には、「教師の教材研究をする場として最適だと思う」、「学芸員や説明員に話を聞いたり質問することによって教える側の知識が広がる」、「授業をする際の引き出しが増える」、「教師も生徒とともに学び成長できる」といった語りがある。「学芸員や説明員に話を聞いたり質問することによって教える側の知識が広がる」という意見を出した実践者は、実際に博物館においてスタッフと話をし、その有用性や意義を強く実感したということと同時に語っている。また、②の有用性と関連するものとして、「教えたいという教員側の意欲も高まった」という声もあり、同時にそれは、「博物館を活用した授業を実際につくる過程で初めて気づくことができたこと」と語られている。①に比して回答者の数は少ないものの、②の有用性は、実践を通しての「発見」や「気づき」ということとともに語られる点に大きな特徴がある。

さらに数は少なくなるが、博物館活用の有用性として、「知識を得るための場の多様さに気付かせることができる」ということについて 11 名の実践者が言及した。いうまでもなくこれは、授業で扱う内容と博物館の資料との関連性の強さだけに重きを置いて認識される有用性ではない。例えば、「授業で見せた資料が近くの博物館にあると紹介することで学びの場を広げることができる」、「学習は学校だけで行うべきものではないことに気付かせることができる」、「生徒が求める面白い知識が学校以外の場所にたくさんあることがわかる」といったかたちで語られている。これらは、教員が博物館を活用して授業を作る、または生徒自身が授業の一環として博物館に足を運ぶことにより、知識を得る場が学校だけではないこと、さらには多様な学習の場が学校とは異なる魅力を持っていること、知的好奇心・探求心に応えるものであることに自ずと気づくことができるという点についての指摘である。授業づくりという主旨で行った実践ではあったものの、博物館の活用は、1 回の授業だけにとどまらない魅力と可能性を宿したものであるとして捉えられた事例である。

一方、博物館を活用した授業づくりにどのような難しさや限界を感じたか、つまり博物館活用をめぐるアポリアについての語りに注目する。

もっとも多く挙げられたものは、教科書の内容との結び付けであった。「博物館の資料は魅力的で、授業で紹介したものが多く、教科書で扱うものや記述内容とうまく結び付けられているかどうか不安がある」、「時間的な制約があるので教科書の内容に沿ったものをうまく見つけるのが難しい」、「図説や資料集にも載っていないものを使う時、どこまで教科書と関連させられるかが難しかった」といったかたちで 22 名がこの点について言及した。また、「生徒たちにとって何が面白いのかを見極めることが難しい」、「教師と生徒との間に感覚や興味の差があるので、何を選ぶべきかに迷いがあった」、「博物館にある多くの資料、情報から何が授業に適しているかを個々に判断することが難しい」という語りも散見される。これらは、資料の取捨選択に難しさがあるとするものである。この点に関することを 14 名が指摘した。その他、実際に生徒を博物館に連れていくことが困難であること（6 名）、博物館活用の有用性を享受できるかどうか地域差（4 名）があることについて複数人が指摘した。

こうした博物館活用をめぐるアポリアについての語りは、今回の事例が授業実践経験に乏しい集団によるものであったことと大いに関わっていると考えられるが、前章で着目した「教員のための博物館の日」で、「授業づくりに役立つ」ことを目的とした取り組みが散見される状況を踏まえると、現職教員も博物館等の活用の際に、資料の取捨選択に一定の難しさを抱えているものと考えられる。この点は後述する今後の課題との関わりの中で検証していく必要があるだろう。

おわりに

本稿は、博物館を活用した社会科・地理歴史科の授業づくりについて新たな知見を得ることを目的とし、それを促進する取り組みおよび授業づくりの実践事例について検討を行った。ここでは、本稿での検討と考察についてまとめ、残された課題について触れておきたい。

まず本稿では、授業づくりにおける博物館活用を促進する取り組みとして、「教員のための博物館の日」に着目し、その開催状況と特徴についての整理・検討を行った。「教員のための博物館の日」は、国立科学博物館が2008年に始めた取り組みであったが、2010年度以降は、他の博物館等が参加するようになって漸次拡大し、2016年度には、27の博物館等がそれぞれの所在地において開催した。「授業づくりに役立つ」と銘打った取り組みが散見され、教員の日々の教育実践に直接寄与することを図ったプログラム編成となっていることがわかる。近年では、「教員のための博物館の日」を行う博物館等自らがアンケート調査を実施して、取り組みについての省察を行う動きも見られ、参加する教員の実態や彼らの需要を踏まえたものとして今後ますます質的な拡充がなされるものとみられる。

次に本稿では、博物館を活用した授業づくりの実践について検討するため、明治大学博物館を活用した68名の実践を事例とし、資料選択の特徴と傾向、授業での活用方法とその特徴、実践者によって語られる博物館活用の有用性とアポリアについて論じた。

今回の事例の検討からは、第一に、「生徒の興味をひくもの」を重視した資料の選択を行い、授業の導入部分で活用することを計画した者がもっとも多かったこと、第二に、ある特定の時代に使用された各種「道具」を取り上げ、それをひとつの手がかりとして、過去の現実アプローチすることを図るものが多数を占めたこと、第三に、実践者が博物館の活用について、「学習内容についての動機づけや関心を高めることができる」、「教員が専門的な知識を得、教授内容についての理解を深めることができる」、「知識を得るための場の多様さに気付かせることができる」という有用性を見出した一方、教科書の内容との結び付けや資料の取捨選択といった点に難しさを感じたことが明らかとなった。

本論中でも触れたことだが、本稿で着目した実践事例は、あくまで博物館を活用した授業づくりに関する経験を十分に有していない状態にある者が、授業を構想したもの限定されている。その意味で、本稿で得られた知見は、教員を目指す学生や初任者、経験年数が短い教員に示唆するところが大きいといえる。しかしその一方で、現場での経験豊かな教員たちの実践からも本稿と同じような知見が得られるかどうかは不明である。こうした点についての検討は稿を改めて論じたい。

(注)

- ¹ 文部科学省「中学校学習指導要領」2008年公示。
- ² 文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年公示。
- ³ 文部科学省生涯学習政策局社会教育課「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」(文部科学省告示第165号)2011年12月20日。
- ⁴ 例えば、国立歴史民俗博物館は、ホームページ内に「先生のためのれきはく活用」というコーナーを設け、「歴博の展示や資料を活用した授業実践例」として、小学校・中学校・高等学校での実践例を28(うち社会科・地歴科は23)例挙げている。(https://www.rekihaku.ac.jp/learning/for_teacher.html アクセス日2016年11月11日) また、横浜市歴史博物館は、ホームページ内に「博物館を活用した授業例」というコーナーを設け、小学校と中学校の「社会科学習指導案」事例を20例掲載している。(http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/taisyou/school/ex_class/ アクセス日:2016年11月11日。)
- ⁵ 「教員のための博物館の日」特設サイト。(http://www.kahaku.go.jp/learning/leader/mdayt/index.html アクセス日:2016年11月11日)
- ⁶ 国立科学博物館が開催した2016年度「教員のための博物館の日」には、文部科学省のほか、東京都教育委員会、神奈川県教育委員会、千葉県教育委員会、埼玉県教育委員会、茨城県教育委員会、全国小学校理科研究協議会、全国中学校理科教育研究会、東京都小学校理科教育研究会、東京都中学校理科教育研究会、全国科学博物館協議会が後援している。
- ⁷ 2010年度以降は「教員のための博物館の日」を開催する機関は博物館だけに限定されていない。詳細は【表1】を参照されたい。
- ⁸ 九州歴史資料館の公式Twitterアカウント(@kyureki_kyuoni)から、「【学校の先生方へ】10月29日(土)に「教員のための博物館の日 in 九歴」を開催しました。バックヤード見学、特別展の観覧の後、当館の学芸員が授業で活用できそうな資料の紹介などを行いました。先生方からは「来年度も是非参加したい」などの声をいただきました(2016年11月10日)と発信されている。
- ⁹ 釋知恵子「教員のための博物館の日 in 大阪歴史博物館」、『大阪歴史博物館研究紀要』第14号、2016年、102頁。
- ¹⁰ 68名はすべて中学校の社会科、高等学校の地理歴史科の教員免許状のいずれか、または両方取得予定の学生である。年齢や所属(明治大学)といった属性の偏りがあるが、ここでの目的は、博物館を活用した授業づくりについての一般化された論を導き出すことではなく、あくまでケースにそくして得られた知見についてまとめることである点を強調しておきたい。
- ¹¹ 明治大学博物館の展示に関しては明治大学博物館HPを参照。(https://www.meiji.ac.jp/museum/index.html アクセス日:2016年10月1日。)
- ¹² なかでも日本で唯一資料である、ギロチンやニュルンベルクの鉄の処女を取り上げるものが多い。